

< 言 語 >

要約

— その性質と実践 —

● 村 越 行 雄

大学で教えていて気になるのが、学生の要約の仕方である。要約とは何ですか、どのようにするのですか、などと聞くほど、要約というものが理解できていないことに驚くことがある。しかし、学生だけでなく、教える側の大学の教員も、また一般の人も、どの程度理解しているかは不安である。単純な分量の少なさのことではない。ただ短くすればいい訳ではない。一体、要約とは何か。概説書を調べてみても、要約に言及した資料は意外に少なく、言及があっても、ほとんどは要約の方法論や技術論と言えるもので、要約そのものを明らかにしたものではなかった。その原因の1つは、今回調べた資料が大学生、大学院生、社会人向けの概説書であり、要約が何であるかはすでに知っており、従って実践面を中心にしたと考えられることである。大学生であれば、要約が何であるかは理解しているはずであるという前提である。ところが、実際に要約を学生にさせると、そうではない。前提にされている要約の性質の理解がなければ、実践してもうまくいかない。当然と言えば、当然のことである。今回は、その点を把握する意味で、以下の9冊を検討し、それを通して要約の性質と実践を考えてみることにする。なお、あくまでも今回調べた資料に限定して話を進める。大手書店で見つけた資料であって、極めて限定的な範囲であって、それをもって一般論にするつもりはないことを最初に断っておく。

今回使用した資料は、以下の9冊である。

石井一成著『大学生のための レポート・論文の書き方』（ナツメ社、2014年）

石黒圭著『よくわかる 文章表現の技術 II 文章構成編』（明治書院、2014年）

大竹秀一著『だれも教えなかった レポート・論文書き分け術』（エスシーシー、2009年）

片岡義博著『うまく書きたいあなたのための 文章のそうじ術 書く力は「捨てるテクニック」です!』（言視舎、2011年）

酒井浩二著『論理性を鍛えるレポートの書き方』（ナカニシヤ出版、2011年）

花井等・若松篤著『論文の書き方 マニュアル』（有斐閣アルマ、2014年）

松本茂・河野哲也著『大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法』（玉川大学出版部、2015年）

三森ゆりか著『大学生・社会人のための 言語技術トレーニング』（大修館書店、2015年）

吉田健正著『大学生と大学院生のための レポート・論文の書き方』（ナカニシヤ出版、2014年）

1：要約の捉え方

要約そのものが何であるかは明示されず、要約の役割や種類の言及があるものはあるが、ほとんどはいかに要約するかの実践面が中心になっている。要約の性質はすでに知っているという暗黙の了解があるようである。ところが、例えば、要約の役割や種類について、明示的であれ、暗黙的であれ、著者によって異なる意見が出されたり、相反する意見であったりする。言い換えると、要約の性質について意見の一致がなく、要約の捉え方にずれがあることを示し、要約の性質がはっきり捉えられていないことを意味する。

要約の性質について、定義という面から見てみよう。「要約」という語を「要（かなめ）を約（つづ）める」として定義しても、それでは何も明らかにならない。ただ「重要な部分を短くする」と言っているにすぎない。何が重要で、何が短いかが分からなければ、要約の性質を知ったとは言えない。それでも、それに近い定義のようなものが見られる。例えば、「要約とは資料の内容について何が書かれているのかを自分の言葉で簡潔に表現しておくことだ。」（花井・若松、89）

文全体を要約する場合、「(パラグラフにおいて要点を示す)「中心文」を集め、字数などを考慮しながら重要なものにしばって並べると、文献全体の要約になります。」、重要な論点だけを要約する場合、「「著者が最も主張したい、いちばんのメインテーマは何か」「どのような方法論で最終的に何を主張したいのか」「疑問に思う点・反論したい点(論点)にしばって要約する」(石井、36)

「本文中の重要な用語や文章表現を使い、筆者なりの表現で記述する。ただし本文をピックアップして、そのまま書き写すのは避ける。本文全体を把握した要約でもよいし、特に重要であると筆者が考える点を中心にした要約でもよい。要約の訓練で大事なものは、著者が何を論じているかを筆者の表現でわかりやすく書くことであり、その範囲が全体か部分であるかはあまり重要でない。」(酒井、118)

「要約とは、「文章などの要点をとりまとめて、短く表現すること」です。「物語の構造」の知識に加えて、キーワードの取り出し方と因果関係を確認しながら要点をつかみ取るスキル…文章から最低限必要な情報を抜き出す「キーワード法」と原因と結果を辿って重要点を抜き出す「因果関係法」を学び、要約の技術を獲得しましょう。」(三森、57)

要約そのものの説明はなく、「的確に文章に要約できたか」、「内容を短く要約して」などと言われるにすぎない。要約と縮約について、「本全体の見取り図を示す「縮約」ができれば、次にその「縮約」をさらに短くまとめて、本全体の要約を書いてみる。この本の一番いいこと、述べたいことのエッセンスがそこに現れなくてはならない。」(大竹、71~73)

卒業論文などの前付けに位置する要約(アブストラクト)について、「要約(要旨、摘要、概略)は、論文の内容を短く説明したものです。その性質から言って、通常は論文を書きあげたあとでまとめます。」(吉田、66)

「ただ単に原文を短くまとめるだけでは、あまりよい要約とはいえない。原文の意味を正確に理解しながら、読者である自分の観点から内容に分析が加えられ、自分の言葉に置き換えられているほうがレポート・論文を書く前段階として望ましい。」(松本・河野、14)

大学入試において課せられる要約の問題で、出題者は受験生の二つの能力を測る。「一つは、出題された文章のなかで、重要な情報とそうでない情報を選別し、話の要点を見抜く能力です。ここからは受験生の理解力を測ることができます。もう一つは、取りだした情報を再構成し、書かれている内容が読者に正確に伝わる、簡潔な文章を書く能力です。ここからは受験生の表現力を測ることができます。」(石黒、265)

新聞の見出し→リード(要約部分)→記事本体、学術論文の見出し→要旨→論文本体などの過程から、「要約の作業も、全体から部分へ、概観から細部へ、というプロセスをたどります。具体的には、(1)全体のイメージをつかむ 目の前の文章が誰に向けて、何を伝えようとしているのかをおおまかに把握します。それが文章の柱であり核です、(2)全体の構造を把握する 全体をバラして意味のまとまりに従って段落に分け、各段落の役割を見極めます。この過程で文章のテーマが明らかになります。(3)全体をひと連なりのストーリーを作るように再構成する。この過程で

いらぬ言葉や文章を落とします。最後に全体の流れを眺め、細かく添削して完成です。」「この過程は植木の剪定作業に似ています。」(片岡、85)

以上が今回取り上げた9つの資料における要約の定義と言えるようなものです。共通しているのは、要(何が書かれているか、何を論じているか、意味、重要なこと、言いたいこと、述べたいこと、など)を約める(短く、簡潔に、的確に、など)ことであり、それに約める(自分の言葉で言い換える)ことである。つまり、要約は「要を約める」と定義されている。それを単純化すれば、要約は「要と約である」と言っているようなものである。これでは学生は理解できないであろう。ただし、自分の言葉で言い換えることを含めることは、原文あるいは本文を単に短くするとすれば、そのまま短くする抜粋、引用などと同じになってしまい、抜粋や引用とは異なるものとして特徴づけることには意味がある。

さらに、要約の性質に関する混乱あるいは曖昧性を表すものがある。上記の引用からも分かるように、要約以外にも、要点、論点、重要点、縮約、エッセンス、アブストラクト、要旨、摘要、概略、リードなどが同等の意味で使用されている。それら以外にも、9冊の資料やその他において、概要、大要、梗概、大略、論旨、あらまし、縮尺、あらすじ、サマリー、レジюме、ダイジェスト、概説などがあり、それら全ては要約と同等の意味で使用されている。もし全く同一の意味ならば、なぜそれほど多くの語が必要かは極めて疑問である。要約が総称で、それ以外の語は具体的な内容であると解釈することはできる。そうであれば、22の語は総称である要約の具体的な内容であると位置づけることができる。たとえそうであっても、混乱あるいは曖昧性が完全に解消することにはならない。例えば、花という語は総称であり、類概念(より広い概念で、上位概念になる)であり、百合は種概念(より狭い概念で、下位概念である)になるが、「百合は花である」は意味が通るが、「花は百合である」は意味が通らず、飛躍がある。勿論、花は全て百合で、百合しかない訳ではないからである。同様に、例えば、「要点は要約である」は理解できるが、「要約は要点である」になると理解しづらい。類概念である要約が、22ある種概念の内、なぜその1つである要点でなければならないかが分からず、飛躍を感じるからである。そこで、そのような飛躍を排除したいのであれば、23の語全てが全く同一の意味を持つとするしかない。そうすれば、どの語にも言い換えが可能になるはずである。そうなると、最初の疑問に戻って、なぜ全く同一の意味の語が23も必要であるかという問題に突き当たってしまう。資料を見る限り、何の説明もなく言い換えられており、それを考えれば、同一の意味で捉えているのであろう。

ただし、その中の1部には明確に区別しているものがある。明確な区別をするのが石黒(266~267)である。要約にはいくつかの種類があるとして、「要旨は、……本文の概要を読者に短い時間で把握させ、長い本文が読む価値があるかどうかを判断させるために使われるものです。…研究論文の要約や新聞のリードがこの要旨に当たります。」、そして「あらすじは、物語文など、ストーリー性のある文章の要約に使われます。とくに、新聞小説や雑誌マンガなどによく見られます。あらすじは、連載ものや複数の巻に分かれている作品を、途中から読みはじめた読者でも違和感なく読めるようにするためのもので、作品の間口を広げる機能をもっています。」と言う。そして、要旨の場合、本文は論説文で、書いてある情報が伝わればよい文章であるが、あらすじの場合、本文は小説などの物語文で、文章を読むこと自体が楽しみになる文章であるとして、要旨は本文を読まずに済ませるためのものであるが、あらすじは本文にスムーズに入っていけるようにするための序論のようなものであると主張する。要約のいくつかある種類の中の要旨とあらすじについて、異なる特徴づけをして区別している。そこに、総称としての要約とその具体的な内容の関係、類概念と種概念の関係を読みとることができる。そして、片岡(106)は、「要約文

とはドラマのあらすじに当たります。」と言う。ドラマにおいては、要約＝あらすじとなる。それらを合わせると、要約は論説文では要旨となり、物語文（ドラマ）ではあらすじになる。それが彼らの考えであろうか。

逆に、同一性を唱えるものもある。吉田（18）は、「レジюмеとは「要約」とか「梗概」のことです。しかし、必ずしもきちんとした文章にするのではなく、読んだ部分の骨組みを鍵となる言葉（キーワード、キーコンセプト）で簡単に組み立てておくだけ、というものもレジюмеです。」と言う。レジюме＝要約＝梗概という同一の意味になり、要約を総称や類概念として他から切り離して位置づけることはしない。また、三森（61）は、「要約文として、…要約（サマリー）なのか、さらに簡潔な要旨（レジюме）なのかの問題に関わる」と言う。要約＝サマリーとなり、それを簡潔にしたのが要旨＝レジюмеとされている。吉田はレジюме＝要約とし、三森は要約＝サマリーを簡潔にしたのが要旨＝レジюмеとするように、語と語の同一化をする一方で、他の語との区別の仕方が異なっている。

さらには、食い違いもある。片岡（90）は、「要約のプロセスは縮尺、つまり原文の長さを目標とする要約文（字数制限）によって異なります。ここでは200～400字の原文を半分にする過程を見ます。」と言う。簡単に言えば、要約＝縮尺である。ところが、大竹（72～73）は、「章なり節なりの要約をつなぎ合わせると、全体の「縮約」が出来上がる。」と言って、縮約について、国語学者の大野晋の「地図で縮尺というように、文章全体を縮尺して、まとめること」（『日本語練習帳』、岩波新書、115）を使用して、「縮尺」とは、全体の見取り図や構成をそのままにして縮めることだ。これに対して要約は、全体の構成や見取り図をあまり考えないで、大事なところだけを抜き出せばよい。そこに両者の違いがある。」と言う。つまり、縮約＝縮尺であるが、縮尺≠要約であるとされる。明らかに、要約＝縮尺と要約≠縮尺の食い違いがある。しかも、大竹は、本全体の見取り図である「縮約」をさらに短くまとめると本全体の「要約」になり、その核心部分を一言で凝縮すれば「題名」になるとしている。縮約→要約→題名という順序で短くなる。要約を総称として類概念にするのではないことが示される。長さによって3つに区別されるのである。しかし、大竹（72）は、「題名」は本の内容の最も短い要約である。新聞なら「見出し」に当たるものだ。」とも言う。題名（タイトル）は要約であるとされるが、縮約も要約であろうか。もしかしたら、要約を総称として、その中で縮約と要約と題名を長さによって区別するつもりであろうか。はっきりと読みとることはできない。題名（タイトル）に同様の考えを示すのが石黒（267）である。「タイトルは……「究極の要約」と見ることができます。……タイトルには、いわゆる本のタイトルだけでなく、論文の題目、メールの件名、新聞の見出しなど、多様なものが含まれます。……（論説文は）文章の内容を凝縮した直接的なタイトルを表すものにたいし、（物語文は）読者の想像力を喚起するような間接的なタイトルを表すものになります。」と言う。2人とも題名（タイトル）を要約の凝縮型、究極型と捉えている。極めて少ない字数で内容を表す訳で、要約の最小単位になると言えるのかもしれない。ただし、要約は「要を約める」ことであり、「約める」は最短になるが、果たして「要」はその最短の文字数で表すことができるかは疑問である。例えば、『批判』というタイトルの本があるとする。2字という最短の文字数である。しかし、「批判」という2字で本の内容を要約していると言えるであろうか、むしろジャンル分けによって批判という種別であることを表していると言えないであろうか。また、例えば、吉田（18）が「本の目次は、その本の大まかなレジюмеと言えるでしょう。」（彼にとってはレジюме＝要約である）と言うように、目次も内容を要約するものと捉えている人もいる。簡単に言えば、書店で本を探す時、まず題名（タイトル）を見て興味があれば、手に取り、次に目次を見

て興味があれば、本の内容を読み始めるのが普通であり、その点から、本の内容を要約するものであると思うのであろう。

さらにまた、否定的な意見もある。三森(68)は、「日本の学校教育の中で主に実施されるのが、説明文、評論文などの要約です。ところが、例えば、言語技術を実施する国々で母語教育の中で扱われる要約の技術は主として物語で、評論文などについては、内容の抜粋(Excerpt)の形では指導されるものの、あまり時間をかけません。それには明確な理由があります。…論文形式では、序論の最後の部分に示された論題と本論の各段落の最初の文、そして結論で再主張された論題を拾い読みすれば、筆者の主張はおおよそ掴めるわけです。この意味で、論文形式で書かれた文章の要約は実は難しくないので。」と言う。それは、エッセイの形式、つまり論文の形式では厳密に規定されており、序論(序論の最終部分に論題を記述する)→本論(段落の最初の文(トピックセンテンス)で段落の内容を予告する、あるいは段落で最終的に述べる内容を簡潔に提示する)→結論(序論で述べた論題を別の言葉で言い換えてまとめる)になるという前提がある。そうであれば、エッセイや論文では、要約ではなく、抜粋だけで十分であると言っていることになる。言い換えると、物語では要約があるが、論文などでは要約=抜粋になり、要約は不要で抜粋のみが求められることになる。

そのような考えは珍しい訳ではない。今回使用した資料には練習問題を載せているものが多い。例えば、文章を与え、それを要約するように指示し、その解答は文章の中の重要なところ(中には、重要な箇所アンダーラインを引くように指示している)をいくつか取り出して、それらをそのままつなぐものがある。まさに、抜粋である。「約める」(短くすること、そして自分の言葉に置き換えること)がなく、ただ「要」(重要なところ)だけをいくつかつなぎ合わせることになる。勿論、抜粋は文章をそのまま取り出すことであって、短さは明示されていないが、普通は文章の1部を取り出すことになり、結果的には短くなるが、「約める」なしに、ただ単に「要」だけをそのままつなぎ合わせるのが要約であれば、もはや要約ではなく、抜粋としか言いようがない。

同様に、学生に口頭で要約するように指示すると、文章の中の重要と思われる箇所をいくつかそのまま読み上げることが多くある。時には、要約するように指示しているのに、文章を全て読み上げる学生もいる。多分、学生は抜粋が要約であると思っているからそうするのであろうし、抜粋は短さを明示していないので、文章全てを読み上げてしまっているのであろう。「約める」なしに、「要」だけを自分の言葉で言い換えることなく、そのまま取り出して言うことは、まさに、抜粋そのものである。同様のことは上記の「短く要約する」(大竹)にも現れている。要「約」は「約める」ことで、短くすることであるが、それにあえて「短く」を付けるのは、「要」約の「要」に重心が置かれているからであろう。

一般的には、要約とは、原文あるいは本文をそのまま取り上げる抜粋や引用とは異なるものであり、詳しく自分の言葉で言い換えれば、分析や説明になり、それらとも異なるものであると考えられる。長短については、抜粋や引用が短く、分析や説明が長くなるのが一般的である。それはあらゆる種類の文章に当てはまるものである。論文では抜粋がよく、物語では要約が必要であるとするように、文章の種類によって抜粋か要約かの選択をするものではないはずである。そうであれば、むしろ石黒のように、要約の中で、論説文が要旨で、物語文ではあらずじであると区別する方がすっきりするであろう。

結局、上記の23の語は、言い換え可能な同一の意味で使用されているのが現状であるが、語の捉え方の相違によって様々な意見が出され、しかも不一致点が多く見出され、そこに要約の性質

に関する混乱や曖昧性を見ることはできる。

次に、今回調べた資料の中には、2つのタイプの要約が言及されるものが多くあった。

ブックレポートについて2つの要約の方法があるとして、1つ目は、「文献全体を要約する(縮小版を作る) 文献全体の「縮小版」を作るイメージです。まず、各章の内容を「パラグラフ形式」でまとめます。」そして、パラグラフでは要点を示す「中心文」が段落の最初にくるのが原則であるとして、次に「中心文」を集め、字数などを考慮しながら重要なものにしぼって並べると、文献全体の要約になります。」、2つ目は、「重要な論点だけを要約する 文献全体をまとめるのではなく、「著者が最も主張したい、いちばんのメインテーマは何か」「どのような方法論で最終的に何を主張したいのか」「疑問に思う点・反論したい点」にしぼって要約するタイプです。」(石井、36)

「本文中の重要な用語や文章表現を使い、筆者なりの表現で記述する。ただし本文をピックアップして、そのまま書き写すのは避ける。本文全体を把握した要約でもよいし、特に重要であると筆者が考える点を中心にした要約でもよい。要約の訓練で大事なものは、著者が何を論じているかを筆者の表現でわかりやすく書くことであり、その範囲が全体か部分であるかはあまり重要でない。」(酒井、118)

「要約の技術1「キーワード法」「キーワード法」とは、文章からその内容を理解するための必要最低限の情報をキーワードして取り出し、それらを繋げて要約文を作成する方法です。」(三森、57)「要約の技術2「因果関係法」「因果関係法」を用いて行う要約は、テキスト(文章)に書かれた「原因」と「結果」に着目して、必要な情報を抜き出す方法です。」(三森、66)

「ブックレポートを書くにせよ、内容を口頭で発表するにせよ、骨子(要点)を箇条書きにしておくとう便利です。レジюмеとは「要約」とか「梗概」のことです。しかし、必ずしもきちんとした文章にするのではなく、読んだ部分の骨組みを鍵となる言葉(キーワード、キーコンセプト)で簡単に組み立てておくだけ、というのもレジюмеです。」(吉田、18)

「要約の考え方は、人によってさまざまだと思いますが、私が考える要約の方法は、大きく分けて二つです。長い本文の無駄な部分を省き、表現を短くして要約文を構成する縮約法(大野1999:114-115)と、長い本文のなかから筆者の主張を取りだし、それに必要な情報を加えて要約文を組み立てる肉付け法です。」(石黒、268)

「これまで見たのは、重要度の低い言葉から落として半分ほどに簡約化する要約方法です。こうした地道なやり方とは別に、大づかみの短文に仕立てる方法があります。「テーマをつかむ」で記した文章中のキーワードを見つけ出し、それを核に最小限の言葉を付け加える方法です。情報を削っていく前者を「引き算型」と呼ぶなら、これは「足し算型」です。ワンフレーズの短い要約文にする場合に適しています。」(片岡、116)

すでに引用した部分もあり重複するが、比較しやすいように並べてみた。要約方法を2つに区別する点では共通しており、内容も大きな食い違いはない。全体と重点、全体と部分、因果関係とキーワード、骨子(要点)とキーワード、縮約と肉付け、引き算と足し算などのように、要約を2つの方法に区別している。呼び方は異なるが、内容的に大差はないように思われる。文章全体から削って要約文を作る縮小方向と鍵となるキーワードに付け加えて要約文を作る拡大方向の2方向が示されている。しかし、よく考えてみると、いずれの場合であれ、文章を要約するには、重要と思われるキーワードあるいはキーセンテンスの「要」を見つけ出し、取り出して、それらをまとめて、文章を「約める」ことで要約するのであって、実際には縮小方向であり、それをあえて2つの逆方向に区別することが必要であるかははっきりしない。ただし、学生に練習させる

為に、文章を削っていくことが難しければ、ともかく鍵となるキーワードあるいはキーセンテンスを見つけさせ、それらに何らかの付加を行わせ、自分の言葉でまとめさせるのは1つの方法であり、文章の中の鍵となる部分をそのまま取り出し、それらをそのままただつなぎ合わせるような抜粋を回避させることには意味がある。要約の性質を理解していない学生にとっては、削ること自体が極めて難しいのであって、縮小方法も拡大方法も止めて、むしろ文章の中から重要と思われるところを抜粋させ、それらを単純につなぎ合わせるようにさせる方が容易になるが。

2：要約の性質

要約の捉え方には様々に異なるものがあるが、それらを見比べると、混乱や曖昧性が生じるのも当然であることがはっきりしたと思われる。それが分かれば、学生が混乱し、曖昧性を感じるのも当然であるし、結局のところ、要約とは何ですか、どのようにするのですか、などと聞くのも当然であることが分かるはずである。要約の性質が理解できれば、要約の仕方も自ずと理解できるようになるであろう。ところが、集約して言えば、要約とは「要を約める」ことに尽きてしまう。そのような定義だけでは要約の性質は明らかになってこない。普通であれば、定義が分かれば、性質も分かるはずである。前にも指摘したように、すでに要約が何であるかは知っているという暗黙の了解があり、それは教員側だけでなく、学生側も自分でそう思い込んでいるのかもしれない。そこで、要約の性質について考えていくことにする。

すでに言及したように、要約という語以外にも、要点、論点、重要点、縮約、要旨、摘要、概略、概要、大要、梗概、大略、論旨、縮尺、概説、あらまし、あらすじ、サマリー、エッセンス、アブストラクト、レジюме、ダイジェスト、リードなどの語もあり、少し調べただけでも23の語が見つかった。これらの語が言い換え可能で、同等の意味として使用されている。勿論、全く同一の意味ならば、なぜこれほどまでに多くの語が必要かは理解できないことになってしまう。何らかの意味の違いがあるはずである。「要約」が「要（かなめ）を約める（つづめる）」とすれば、『明鏡国語辞典』（大修館書店）の定義を使用すると、物事の大切な箇所の「要点」、議論の中心となる点の「論点」、文章・談話などの主要な内容の「要旨」、重要な箇所を抜き出して記することの「摘要」、かいつまんでまとめた要点の「摘要」、大体の要点の「大要」、議論の主旨の「論旨」などは「要」の側に位置するものであり、縮めて短くする「縮約」、大体の内容の「概略」、物語などのあらすじの「梗概」、事のあらましの「大略」、地図・設計図などを実物よりも縮めて書くことの「縮尺」、大体の次第・内容の「あらまし」、物語や物事の大体の筋の「あらすじ」などは「約める」の側に位置するものであると分類することができる。簡単にまとめれば、要か約かの比重の置き方の相違である。カタカナ語については、summary は最も重要なことを集めた総計であり、essence は最も重要な特質（本質）であり、abstract は抽出することであり、resume は前のことを簡単にまとめることであり、digest は消化され、こなれることであり、lead は先導することである。「要を約める」全体をそれと類似する状態に置き換えることであり、日本語とは異なるものである。つまり、日本語と英語における語の使用が類似することで置き換えられている。哲学者ウィトゲンスタインの使用理論（『哲学探究』）を使って語の意味＝語の使用であると考えれば、日本語と英語の異なる言語間では、語自体が本来持っている意味からではなく、語の使用が同一か、類似するかによって置き換えられて翻訳されるからである。それに対して、日本語の方は語自体が本来持っている意味から来るものである。

従って、6つのカタカナ語を別にすれば、17の日本語は、「要約」を基本形として、そのバリエーションが16語あると捉えることで、すっきりと説明できることになる。基本形とバリエーション

ョンの関係は、総称と具体的な内容の関係、類概念と種概念の関係としても言い換えることができる。結局、「要約」という語は、「要を約める」を基本にし、それを変形する方法で、「要」と「約」の比重の置き方の相違、さらにそれぞれに置かれた比重の中での具体的な内容の相違によってバリエーションができたのであり、そのような語本来の意味に関するバリエーションとは異なり、カタカナ語は外国語翻訳上の問題の為に、同一の意味を持つ語を見つけ出すことができず、「要約」全体として同一あるいは類似する語の使用状況を考えて、その範囲内でカタカナ語が付けられ、追加されたものである。

「要約」という語の周辺に位置する語はどう説明できるか。「抜粋」という語はどうか。抜粋は文字通り原文からそのまま抜き出すことであり、まさに1文字1文字忠実にそのまま抜き出すことであり、その点では、「引用」という語も同様である。原文からいくつかの箇所をそのまま一切手を加えずに抜き出すことが抜粋になる。それらの抜粋を自分の言葉に言い換えることを求める考え方が一般的である。要約の「約める」に短くすることだけでなく、自分の言葉で言い換えることも含めるのである。自分の言葉での言い換えは、いくつかの抜粋を単純に並べてもまとまりがなく、日本語表現としておかしくないように、意味が通るようにする限りでは必要であるが、それを越えて自分の観点から見直されると、それはもはや「解釈」になってしまう。要約はあくまでも著者の考えをそのまま正確に反映させるべきものであって、その範囲内での言い換えは可能であるが、それを越えて読者の考えをたとえ少しでも反映させれば、もはや著者の考えではなく、読者の考えを反映させた解釈になるからである。「引用」という語も抜粋と同様であるが、ただ単に抜粋するだけでなく、自分の考えを説明したり、証明したりする為に、他の人たちの考えを引き出してきてくることである。その目的の為に、抜粋引用（原文からそのまま正確に引き出すことで、「…」という形になるのが普通である）と要約引用（著者の考えを正確に反映させる形で短くまとめることで、引用であることを明記し、原文そのままではなく、要約したことを知らせる必要がある）がある。つまり、引用の際に、抜粋か要約かを明確にする必要があり、そこに抜粋と要約の相違を見ることができる。ただし、要約する場合、単純に抜粋するのは異なり、自分の言葉で言い換える限り、どうしても読者の考えが出てしまう危険性が絶えずあることに注意すべきである。そのような危険性を避ける意味で、学生に教える場合、要約を抜粋として教え、自分の言葉での言い換えを最小限に止めることは1つの方法としてあり得る。「抜粋」を「要約」にすることで「解釈」になるケースが実に多いからである。著者の考えを正確に反映させる解釈であれば要約と言えるが、誤解釈によって著者の考えからずれが生じれば、もはや要約ではなく、単なる読者の考えになってしまうケースが学術書、学術論文などに頻繁に見られるのは事実である。ともかく、「抜粋」と「要約」と「解釈」は異なるものでありながら、実際に行ってみると、その線引きが実に曖昧であることに気づくであろう。そうであれば、「約める」は短くすることだけに限定し、自分の言葉での言い換えを削除する方が妥当であると言えるかもしれない。勿論、著者の考えを正確に反映させる解釈に基づく要約であれば問題がないのであり、短く、簡潔に、的確に言い表す以上、どうしても自分の言葉での言い換えは必要になり、問題は著者の考えを正確に反映できるような解釈、つまり正確な理解があればいい訳で、自分の言葉での言い換えを削除することはないとも言える。正確な理解ほど難しいものはなく、他者の理解は勿論であるが、自己の理解も難問中の難問であることは注意すべきである。

次は、「要」の意味である。「要」という語は、扇の骨を綴じ合わせる為の釘のことを意味し、文章で言えば、個々バラバラにある文を綴じ合わせて1つにすることである。それは、テーマである。著書全体であれ、章や節であれ、段落であれ、いかなる単位の文章のまとまりであれ、テ

マについて記述や陳述されるもので、いくつもある文や発話を1つのまとまりにする要はテーマである。簡単に言い換えると、考えである。著者の主張したい考えである。著書全体から段落まで、全体とその構成要素の関係にあり、著書全体のテーマがあり、それを構成する各段落には1つのまとまりのあるテーマがあり、それらが連なり、全体のテーマの主張を可能にさせている。語は概念を表し、文は思想を表し、それらの思想を連ねて、1つのまとまりのある文章において主張が表される。そして、意味の最小単位は語ではなく、文であるとするのが一般的であり、それらの文が連なって1つの意味のまとまりが段落であるとするのが一般的である。それがテーマを中心にしたまとまりになる。テーマが変われば、新しいテーマの元にくいつかの文が連なり、新しいまとまりのある段落ができ、段落が連なって節ができ、章ができ、著書全体ができあがる。それぞれにテーマがあり、それを元にして段落、節、章、著書全体にまとまり上がっていく。それは、全ての文章の形式に当てはまるものである。論文形式だけでなく、物語形式も、またそれ以外の全ての形式に当てはまるものである。ただ、例えば、小説のように、明確な段落は見えてこないが、それは物語の流れを重視するからである。それでも、1つの意味のまとまりである段落に分けることはできるし、主人公の登場、出会いの場面、背景、恋愛、喧嘩、別れなどように流れを分けて捉えることができ、それぞれにはテーマがあり、それを中心にした描写がある。

従って、テーマを中心にした段落分けはあくまでも全ての文章形式に当てはまるものであって、その上で、目的によって論文形式や物語形式に区別すべきものである。あまり形式の相違に気を取られて、全体像を見失うべきではない。それに加えて、要約は削除して短くするという考えも疑わざるを得ない。重要なもの、主要なもの、大事なもの、大切なもの、必要なものなど、言い方は人それぞれ異なるが、それらを残して、それ以外の重要でないもの、主要でないもの、大事なでないもの、大切なでないもの、必要でないもの、言い換えると、無駄なものを削除するとする考えは奇妙である。テーマを設定し、そのテーマについて述べるのであって、テーマとその展開は何1つとして重要でないものはないし、無駄なものは何1つもないはずである。テーマ部分と展開部分は、少なくとも著者にとっては全てが必要不可欠なものであって、無駄であると思うのであれば、最初から入れないはずである。もし短くするのであれば、削除ではなく、何がテーマであるかを見つけ出し、要約の分量（要約に字数制限がある時）に従って、テーマを支える展開部分から1部を取り出すことしかないはずである。つまり、削除ではなく、見つけ出しである。何がテーマで、何がそのテーマを支えるかを見つけ出すことである。「重要」などの語をどうしても使いたいのであれば、重要度という程度の差であって、重要でないとは避ける必要がある。なぜ「重要」などの語を使いたくないかは、テーマについて述べる方法にはいくつもあり、例えば、例証であれば、テーマについて説明する為に、いくつかの例を使用することがあるが、テーマを理解する上で1つの例で十分であったり、例がなくても理解できるのであれば、取り上げないことになるが、それは重要でないとか、無駄であるとか、そのような理由で削除するのではなく、テーマの理解にとってどれほどの支えが必要かで決められるからである。

以上のように、「要約」は「要を約める」ことであるが、それは「テーマを簡潔に述べる」ことである。

3：要約の説明

要約の性質はかなり見えてきたと思われるが、まだ十分ではない。要約を説明するには、さらに考えなければならないことがある。

「要約」は、今回調べた資料のように、多くは「要を約める」タイプに集約できるものである。

それを「テーマを簡潔に述べる」とすることで、その性質はより明らかになる。しかし、要約は、今回調べたような書き言葉だけに限定されるのではなく、話し言葉にも同様に言えることである。それを反映させれば、「テーマを簡潔に述べる（記述する、陳述する）」となる。さらに、書き言葉や話し言葉という言語だけでなく、その根本には思考における要約というものがある。個々バラバラの現実を意識の中に取り入れ、意識の中で個々バラバラ状態でもの（外的な物理的なもの）が内在化して、内的なもの（概念）としてある）があるが、それらを何らかの形でまとめ、それを言語として外在化する（意識の中のもの（概念）が外に出ることで言語になる）。外的なもの（物理的なもの）→内的なもの（概念）→外的なもの（言語）となる。語が概念を表し、文が思想を表し、まとまりのある文章（段落、節、章、著書全体）が主張を表すと言えることになる。それは、意識の中で、思考によっていくつかの概念をまとめて思想を作り、いくつかの思想を集めて主張を作ることを意味する。いくつかの概念をただ並べただけでは思想にはならず、思考における要約によってそれらの概念を思想に仕上げる必要があるし、またいくつかの思想をただ並べただけでは主張にはならず、思考における要約によってそれらの思想を主張に仕上げる必要がある。まさに、それらが言語化されて文になったり、まとまりのある文章になったりする。

思考における要約を言語化することで文になったり、文章になったりする。そこで、後者の思考における要約が言語化される文章について考えてみる。著者によってテーマが明確に表される場合もあれば、そうでない場合もある。それは、著者が意図的にそうする場合と著者自身の問題である場合（いつもははっきりしない文章を書いているなど）に分けることができる。ここでは前者を取り上げる。何がテーマか、何を主張したいかを直接的に全て言語で表現し、相手はその言語を理解すればその意図を理解することができるという直接的・字義的表現がある一方で、全て言語で表現するのではなく、むしろ言語で表現しないことで自分の意図を伝え、相手は表現される言語だけでなく、その他の情報によって解釈するという間接的・非字義的表現がある。つまり、字義的表現ではテーマが言語になって直接現れるが、非字義的表現では言語にならず解釈によって間接的に推論するしかないことになる。その非字義的表現には比喩と含意がある。重要な理論としては、全ての言語表現は比喩表現であると言い、自ら革命を起こしたと言うレイコフ（レイコフとジョンソンの共著『レトリックと人生』）の比喩理論があるし、会話を聞き手側から理論化し、表現される言語とその他の情報から状況証拠的な推論によって含意を解釈するグライスの会話含意理論（「会話と論理」）がある。結局、「理解」と「解釈」を厳密に捉えれば、意図を全て言語で表現する字義的表現では、表現される言語だけを「理解」すれば、それだけで意図は理解できることになるが、意図を直接言語で表現しない非字義的表現では、表現される言語の理解だけでは意図は分からず、意図を知る為には表現される言語以外のものも含めて推論によって「解釈」するしかないことになる。なお、非字義的表現の中でも、表現される言語（言語的意味）以外のことを伝えるのが比喩（「君は野菊だ」と言って、「君は美しい」を伝える）であるのに対して、表現される言語以上のことを伝えるのが含意（「雨が降っている」と言って、「傘を持って行きなさい」を伝える）であると区別することができる。

学生向けの概説書は理解しやすいように、テーマが明確に言語として表現されている字義的表現が中心になる。そのこともあって、これまでの説明では、あくまでも字義的表現を対象にして、要約は抜粋であっても構わないし、その際自分の言葉による言い換えは最小限度に止め、いくつかの抜粋を集めてまとめる時に日本語の表現として意味が通るようにすることに止めるべきであると言った。しかし、ここに至って、非字義的表現も対象になれば、抜粋という表現される言語だけを見ているとテーマは見えず、抜粋の裏に潜むテーマを探り出す為に解釈するしかないし、

自分の言葉で表現するしかないことになる。また、ここに至って、要約が書き言葉だけでなく、話し言葉も含む言語における要約になり、さらに思考における要約になることが明らかになった訳で、著者と読者という書き言葉に限定せず、それらを含めて「発信者」と「受信者」を使うことにする。「要約」は、「発信者がテーマを簡潔に述べて（記述する、陳述する）自分の思考を伝え、受信者はその意図を理解あるいは解釈し、自分の言葉で表現する」ことであると言える。

要約の性質を「発信者がテーマを簡潔に述べて（記述する、陳述する）自分の思考を伝え、受信者はその意図を理解あるいは解釈し、自分の言葉で表現する」とすることで明らかにすることができる。少し具体的に説明すれば、要約は書き言葉や話し言葉による言語上の要約と頭の中でまとめる思考上の要約があり、最初に思考上の要約があって、それを言語を通して表現するが、全てを言語で表現する字義的表現と全てを言語で表現しない非字義的表現があり、いずれにするかは発信者の判断であり、自分の意図がはっきりと伝わる方法で行うことになり、その際重要なことは、発信者が自分の思考を正確に伝える為に言語を通して（直接的であれ、間接的であれ、何らかの形で言語を使用して）簡潔に述べることである。言い換えると、簡潔に述べないことは発信者の責任になる。発信者自身の問題で、いつもはっきり伝えない場合とか、適した比喩や含意を使わずに、かえってテーマがはっきりしなくなる場合とか、物語文であえて段落分けを行わず、テーマを明確にしない場合も含めて、それらは発信者の責任である。それを受けて、受信者は言語を通して（直接的であれ、間接的であれ）伝えられる発信者の意図を言語上で理解したり、言語とその他の情報から解釈したりすることになり、その理解された、あるいは解釈された発信者の意図を自分の言葉で表現するが、発信者の意図を受信者の観点で勝手に受け取り、発信者の意図から逸脱するような解釈は決してせずに、あくまでも発信者の意図を正確に自分の言葉で表現することに注意すべきである。発信者の意図の理解あるいは解釈、そして受信者自身の言葉による表現は、今度は、受信者の責任である。

上記の説明が細かすぎると思うのであれば、単純化して、「要約」は、一般的に「要を約める」と定義されているが、要約の性質を知るには、むしろ「テーマを簡潔に述べる」とする方がより明確になる、と言うだけでいいであろう。

4：最後に

要約は思考上でも、言語上でも日常的にいつも行っていることであり、人間にとっては根本的な行為である。頭の中での要約や会話での要約などは、論文やレポートの書き方の背景にあるものであって、上手に書くことは、日々の考え方、言い方に深く関わっていることで、書き方だけに集中して、それだけを訓練しても、その背後にある考え方や言い方が疎かになっては上達はあり得ない。例えば、昨日の出来事を話す会話で時系列に起きたことをただ並べるだけでは、結局何を言いたいかははっきりしないし、それは頭の中で考えがまとまっていないからである。高校時代の友人に会ったとか、友人と喧嘩したとか、安い店を見つけたとか、何でもいいが、何がテーマで、それについて何を述べるかをはっきりさせれば、一言で言えば、要約すれば、何が言いたいかが見えてくるものである。日常生活に深く根ざした要約という行為を日々の訓練で実行しなければ、いくら論文やレポートの書き方を訓練しても効果は上がらないであろう。よく言われることであるが、上手に論文やレポートを書くには、その構成や構造を理解し、多くの資料を読むように勧められるが、それはあくまでも日々の考え方や言い方が土台にあり、それがあって初めて可能になるものである。古典レトリックのように、テーマが設定されたら、まず何を話

題にするか（発想）、次にどの順序で話題を並べるか（配置）、次に具体的にどのような言語表現をするか（修辞）、その後で出来上がったものをいかに暗記するか（記憶）、それを人前でいかに伝えるか（発表）、それらの5部門から構成されるのが説得を目的にする弁論である。それは現在のスピーチ、プレゼンなどの話し言葉にも言えることであるし、前者3つは現在の論文やレポートなどの書き言葉にも言えることである。その根底にあるのが論理的な思考方法である。最後になるが、思考こそが全ての根本である、と言って終えることにする。